



女性室
広報誌

PUBLIC
RELATIONS
MAGAZINE

あいあう 2011 DEC. 23

- 女性室公開講座 ～なにが受け継がれてきたのか、なにを受け継いでいくのか～
- 一杯のコーヒーから ～カフェあいあうで出あったこと～
- 女たち男たちの歴史、今、そしてこれから
- 第11回 女性会議
- 女性室公開講座 長浜会場

女性室公開講座

～なにが受け継がれてきたのか、
なにを受け継いでいくのか～

カフェあいあう



二〇一一年五月十日、女性室公開講座が「なにが受け継がれてきたのか、なにを受け継いでいくのか」をテーマに、真宗本廟の向かいにある総会所で開かれました。講師の梶原敬一さん（姫路医療センター医師・教学研究所属嘱託研究員）は、今まで教学として伝えてきたものの中には女性解放の視点はなかったことをふまえ、今後宗門の中で男性と女性の問題をどう問うていくのかということをお話されました。

その後、尾畑潤子さん（三重教区員弁組泉称寺衆徒）と平田玲子さん（奥羽教区秋田県中央組浄圓寺住職）を加えてシンポジウムが行われ、「変成男子」の和讃や『仏説観無量寿経』を女性の視点で読むことなどについて意見が交わされました。

また来場者全員で「女と男のあいあうカルタ」が行われ、日々の暮らしの中にある差別問題が和やかな雰囲気の中で語られました。

基調講演

講師 梶原敬一さん



中から湧き起こってこなかった問題

私は女性室が作られてきた経緯は十分には知らないわけですが、決して宗門の中から湧き起こったものではないことを押さえる必要はないと思います。世の中に男女共同参画が言われて、女性の人權が社会の問題として語られた時に、それを宗門の中でも、という形で始められたものです。そう思うと私たちは、七百年あまり親鸞聖人の教えを伝えてきながら、教えの中には女性解放の視点はなかったと言わざるをえません。あるいは親鸞聖人の思想を全く欠落した形で伝えてきたと言えるかもしれません。

内発的な問題として女性の問題が語られなかったことは、女性室ができた意義とともに問題にしなければならぬことです。部落差別の問題もそうです。部落の人たちの解放を求める声の中で初めて仏教の中にある部落差別の問題が見えてきますし、あらゆる差別がそこに見えてくるわけです。これは仏教が求めていたものと、それを伝えてきたものの間に大きな変質があったのではなからうかと思っています。

浄土とは

私たちは浄土真宗を名告^{なつ}っていますが、浄土とは一体何かと確かめることなく、ただ浄土に往生することだけを救いだと思ってきました。そこが一番の問題ではなからうかと思えます。浄土に往生したら人間はどのようなものとなつて救われるのか、現実の中にある人間関係そのものを問うことはなかったと言わざるをえないと思うのです。浄土には、女人と根欠と二乗がないと聞かされてきました。この三つがないというのは私たちの差別する心を否定しているものであつて、差別されているものを否定しているのではありません。言い換えれば女人を女人、根欠を根欠、二乗を二乗として差別する心を浄土は嫌いそしてという形で、そのようなものでない世界を明らかにしようとしたのが『浄土論』であらうと思います。

差別する心を厭^{いと}うということが浄土のはたらきとして押さえられなければ、ただ単に差別のないところに行つて、みんなが平等に自由に生きられるようになることを求めているということになってしまう。現実を問う、差別している自分自身を問うということが生まれてこなかった。浄土と現実とが切り離されて、それを教学だと押さえてきたからではないかと思うんです。

現実を問うということがようやく宗門の中に入るようになったのは、明治以降宗門が世俗との関係の中で苦しんだからであります。そしていまだに真宗の課題は、信心の課題として差別を克服することであるとはっきりと言いきれない状況が残っている。今もって浄土の課題を現実のものとして引き受けているように思えないんです。浄土と穢土とが別のものではないというのが、親鸞聖人の最終的な確

かめであつたのだらうと思います。

法を継ぐこと

ようやく近代になつて教学の中で、浄土とはこの世を超えるのではない、この世に超え出るのだと押さえられてきている。しかし、なお女性の問題が聞こえてこない。差別しているということを外から指摘されなければわからない。これは私たちの教団の体質といつても仕方がない現実です。女性住職にまつわる一番の問題は、女性の問題というより寺をいかに続けていくかということがあつたのではないか。寺を継ぐというのは、法義を相続することです。法を継ぐことができるのが果たして親から子なのかということは、親鸞聖人以来の大きなテーマであります。恵信尼と親鸞聖人の夫婦のあり方を理想的なものとするこゝによつて、家族の中で法が伝えられていくと思ひ込んできた歴史があるのではないかと思います。

親鸞聖人は聖の人であります。民衆の中に消えていった人のことを聖の人と呼ぶんです。決して上人ではありません。親鸞聖人の最終的な確かめは、自分自身を凡夫と確かめた上で、その凡夫であるからこそ往生できると押さえられたことでもあります。それは凡夫としてどのような形で生きるのか、人と人がどのように出あうのかということに他なりません。

女身を厭う

女性の問題を語るときに一番見落としてはならないのが女身という問題です。親鸞聖人が女身という時に、身とは

関係を表すのであつて、具体的な肉体をあらわすわけではない。身を厭悪するとは、関係を厭うわけです。自分が女身という役割を果たさせられているという関係を厭うということですから。坊守や住職という役割が、親鸞聖人が言われた浄土の関係を表すものでないことは言うまでもないでしょう。親鸞聖人は、女性という役割の中に人間そのものが見失われ、主体性を失つてしまつていてと確かめられたに違いありません。浄土とは人間の尊厳を確かめ、そこに本来に平等な関係がつくられ、いのちがいのちを感覚し、いのちの声を聞き、いのちの光を見ることができる世界だと言っているのだらうと思うのです。それを妨げているのは私たち自身の有り様なのです。それを変えていくことができるのか。あるいは変えていくにはどうしたらいいのかが、親鸞聖人が伝えたことではないかと思ひます。

男女という役割を超えていくのは念仏以外にない。超えた姿が凡夫です。一人ひとりの苦悩は消えなくても、どんなに辛い人生であつても、生きていてよかったといえるのが、常没^{じょうぼつ}の凡夫人が大涅槃を証することでしょう。孤独な苦悩ではない、共なる苦悩を得たものだけが喜びに変わる。そのような関係に夫婦が、あるいは親子が変わることができるのかということが、女性室の一番の課題でしょう。女性が単に社会的男女、男性女性の権利の問題であればこれはもう、制度としてきちつと直せば良いだけです。親鸞聖人は、差別し続けていては人間は救われないことに気づいた時に、その声を上げることができない者の声を聞き取ることがなければ、人間は救われることはないんだと確かめたんだと思います。

声なき者の声

南無阿弥陀仏は、声なき者の声であります。南無阿弥陀仏によつていのちが叫ぶ。私たちがいのちを見失っているからいのちが叫んでるんです。そのいのちの叫びを聞き取ることによつて、初めて自分自身が差別していることに気づくわけです。そして差別を超えていかなければならないという思いが湧き起こつて来る者こそ凡夫であります。念仏とは決して差別されている者が、差別されていることを抗議する声ということだけでなく、差別している者が差別していることに対する痛みの声として上げている声です。その痛みの声があれば念仏は念仏になりません。

百年あまりの近代教学にあつて、自分自身の差別してきた声が、具体的にその差別している対象を見いだすことができたかと言いますと、それが中々見えない。真宗の話を聞きながら、自分が何を差別しているのかということに気づかないからです。差別された者の声に聴えうるのは、差別をしている自覚だけです。自分の中にある差別する気持ちに気づかなければ自分の生活は変わりません。夫婦の関係も変わりません。

無義をもつて義とす

ややもすると、虐げられた人は自分の解放を求める声に負けてしまいます。親鸞聖人は「無義をもつて義とす」と言われていますが、「無義」とは虐げられた者が自分自身の解放を求める声に他なりません。でもその自由を求めている声を自分自身で本当に聞いているのか。その声をゆがめて、自分の中の聞きたいものだけを聞き取っているのだから、それは「無義」をしてしまうことです。「正義」にしてしまつと「無義」の力はなくなつてしまいます。ですから解放を求めて声をあげる者は、その声によつて自分自身の差別する心と対話することによつてしか、自分自身の「正義」を「無義」にすることはできないのです。仏法を通して自らを問い、自らを問うことを通して仏法が仏法になつていくことが、仏法を引き受けるということでしょう。仏法が寺という家庭の中で作られていくわけではない。むしろ家庭を通して本当の仏法を明らかにしようとする苦闘の背景があつて初めて寺で仏法が聞ける。

善人から悪人へ

差別者の自覚がない者に念仏の声は聞こえないでしょう。差別されている者があげた声は自分があげたんじゃない。自分のいのちがあげた声です。その声を自分の声だと思ひ聞き間違えたら念仏が遠ざかつていく。だから難しい。だからどこまでも聞き続けなければならぬのです。寺の方々は善人です。自分自身の中の悪人の自覚、差別する者であるという自覚において差別を憎むということがなければなりません。差別される者の立場では善人の運動です。だから宗祖は、「転悪成善」(悪を転じて善となす)と言う。悪から始まる善があるんだと言ふんです。そういうものとして運動が成り立っているのか。女性が自分が差別されることにおいて、自分の中にある差別心とは何かと問い直し、「正義」から「無義」に変えていくような運動にならないければならぬと思うのです。「正義」と「無義」とは自分自身の中の善、正義を自覚するのか、悪を自覚するのかという違いとして押さえることができると思います。

女性室が生まれた意味

親鸞聖人は「ねんごろの心」と言いますけれども、自分も含めて人間そのものが悲しみによつて包まれた時に世界はよみがえる、そのことを念仏が教えているのだと思うのです。それは共に聖教を読みながら念仏していく道が始まるということしかありません。ただ女性が男性と同じように住職を職業的なものとして獲得しても何にもそこから始まるものはない。寺の封建的体質は残る。社会に対して害悪です。寺が人間の自由を謳う限り、自由を獲得する場所ではなければなりません。私にはわかりませんが一緒に考え悩んでいくような寺に変わっていくことが、女性室が生まれた意味だろうと思います。家族として経済的に生活を共にしている寺と、仏法が伝えられる場としての寺とを区別することが大切だと思います。そうすれば本当の意味で念仏が生まれ、聞こえてくる場所が開かれてくるのではないでしょう。念仏によつて家族のあり方が変わる時に、初めて社会の声によつて動き始めた女性の問題が宗門の課題、仏法の問題になつたと言えらるのではないかと思います。大谷派には大谷派の役割があります。宗教の価値観によつて社会の問題を明らかにし、社会に対して働きかけていかなければなりません。社会の要請にこたえるだけの宗教では駄目なのです。本当の問題は何かということを経済に返さなければなりません。今後の女性室のあり方や教学のあり方を考えていく上で一つの参考になればとお話させていただきました。(抄録)

女性室公開講座 シンポジウム



●パネリスト 梶原 敬一さん 尾畑 潤子さん 平田 玲子さん
●コーディネーター 見義悦子(女性室スタッフ)

●見義 女性室では、男性と女性が本当の意味で出あいたいという願いをもって「男女両性で形づくる教団」を目指して活動してきました。具体的には制度機構や歴史を問い直す歩みでもありました。今日はこうした歩みを共にしてきたお二人の方から今課題になっていることをお話いただきたいと思います。

●尾畑 梶原先生のお話をお聞きしながら、あらためて住職や坊守として生きるとはどういうことなんだろうかと思いました。これまで坊守会などで、親鸞を支えた良き坊守像としての恵信尼を男性たちから聞いてきました。その恵信尼像に違和感を持ちながらも、なかなか疑問の声を上げられないまま聞いてきたという思いがあります。また『観経』についても、息子に背かれて苦悩する韋提希から発せられる悲しみの言葉を、多くの場合、男性たちは韋提希の愚

痴と言ってきたと思います。果たしてそうだろうか？ そんな思いを持ちながらも、語る男性、聞く女性（坊守）という枠組みから私たち女性にはなれなかった。今もそうです。

そこで四年前から、三重の女性たちと『観経』を読み始めました。その中で、例えば、「自絶瓔珞」の瓔珞とは、「インドにおいて王公貴人は装身の具として瓔珞を用いる」（望月仏教大辞典5）という言葉に出あいました。それは身分を表すものであること。そして韋提希は逃げ出すことも諦めることもできない苦しみのただ中で、お釈迦様を目の前にして、国王の妃（ワシャトリヤ）の象徴である瓔珞を自ら絶った。それはヒンドゥー教との決別を意味し、韋提希が仏教の平等の教えに出あっていくということが表されているのではないかと思います。私たちの読み方は間違っているかもしれませんが、言葉に出さなければ間違いは間

違いだとわからない。指摘されることもありません。間違いを恐れず、まず読んでみるのが大事なかと今思っています。

●平田 私は小さい時から「女はどうせ外に出るのだから、お寺のことは知らなくてもいい」と言われて育ちました。それに反発して仏教美術史を専攻したのですが、跡継ぎのはずの弟が住職になるのを嫌って歯医者になり、寺から出ていきましたので、三年前、急遽私が住職となりました。去年女性室主催で「女性住職の集い」が開かれ、全国から約三十人が集まり、様々な苦労や悩みを夜を徹して話しあいました。どこの地でも女性住職は珍しがられ、住職が勤まるのかという疑いの眼で見られます。ご葬儀の時の和讃は男性用、女性用と分かれていますが、女性が亡くなった最期に「変成男子の願をたて」と読むのは、その女性の人生を否定されているような悲しい思いがするので読めないという話も多く聞きました。男性の住職の中には「この和讃に書いてあるように女性というのは男性より劣っているのだ」と言う人さえいます。そういう社会的な差別があることを知っていただいて、皆さんと一緒に考えていただきたいと思っています。

●尾畑 「変成男子」の和讃とか「五障三従」のお文は、聞いている私にとっては、やはり辛いものがあります。その思いを大事にして、自分自身は読まないということがあってもいいのではないかと思います。その上で、なぜ女性の救済としてこのような表現が生まれてきたのか。「女性室」で始まっている取り組みが、それぞれの地域でも始めていければと思います。

●梶原 「変成男子」の願は男女の優劣の問題ではありません。韋提希が璣瑠を断つことは女身を厭悪した姿だと思います。女性が『観經』を読んだら、韋提希にとって阿闍世の救いが最も大きな課題として流れていることが読み取れると思います。「いつつのさわり」は王となる力がないということ、仏教には強さが必要だということです。丈夫の心を持った者でないと菩薩の道を歩けないと。ところが強さのない情けない人間でも救われることを明らかにしたのが浄土の道ですから、むしろ弱さとしてあるようなものが往くのだと言った時に、女性の身を転ずることによって始まっていく道こそが人間の救いだ親鸞聖人は言ったんだろーと思います。

男性は女性ではない分だけ、もうひとつ困るんです。韋提希は阿闍世を通して悪人を生きた人だと思います。だから女身の問題を考える時に母親として子どもにける愛情がかえって子どもを束縛し、子どもによって自分が束縛されているように見えます。一生懸命子育てをして何にもならなかった人生が転ぜられる、変わっていく。「女身を厭悪せん」ということは発菩提心の始まりです。男も男であることを厭悪しなければなりません。ただ、男性の場合は「王たらん」とする権力欲、名誉欲が強く打ち出されています。今は女性も男性も権利欲や名誉欲もあるし、政治も女性の方が向いているかもしれない。性の差より個人の差が大きいことがわかってるのに、それを性の差に押し込めようとするのは今まで権益をもってきた男性ですが、それはもう通用しなくなっています。

仏道を求めていく者は家庭を捨てなければならぬというのが昔の教えでしょうが、親鸞聖人はそうは言っていない。むしろ家の中にとどまらなければ見えてこないものも

あると。「常没の凡夫」の没というのは世間に、家庭にどっぷり漬かる事です。その中であってなおかつ道が開けていくのが本当の意味での念仏の道です。家庭に縛られるとか縛られないということが関係なくなることが転ずることでしょう。

苦勞ばかりの人生が無駄ではなかったと転ずる。女性の人生を貶めるためではなく、讀るためだと思います。一番中心になっているのは第十八願です。念仏申してその念仏に信というものが頂けるかどうか、その一点にかかっていて、性差は関係ない。そこが中心になった上で差別の問題が出てくるわけです。

儀式で男性の優越性を言おうとする男性はまったく仏法を説く資格がないと思います。そういう住職を支えてきた坊主さんもたくさんいらっしゃいます。死者を悼む心をもってどんな和讃をあげるか一緒に考えていけばいいと思います。

●尾畑 以前、女性の牧師さんから「聖書を読む時にどういう視点、だれの立場に立って読むのか、その視点によっては必ず女性を解放するメッセージが読み取れるはず」と教えていただいたことがあります。女性たちで経典を読むというのはこれまでにない経験ですから、その時に、一緒に読む仲間がいるということは力にもなるし、いろんな視点から読むことができると感じています。

●平田 女性の立場でこのような公開の場で話せるようになったことは嬉しいことです。これからも男女のあり方をもっと多くの方が語りあい、信仰を深めていくことが大事だと思います。



変成男子の和讃は、私も女性として
感情的には受け付けられないものがあります。
でも次の段階として、聖教の学びを
深めることが必要だと思いました。

参	加	者
の	声	アンケートより

宗門が性差別に対して取り組みをはじめて、
やっと宗門の課題になったのだうれしく思いましたが、
単純に喜べないものを日々感じます。
最近は少しづつ女性たちも声を
あげるようになったのですから、
男性はもちろん、女性たちも真剣に
耳を傾けなければいけないと思います。
そして、単に宗門の問題だけでなく、
社会への問いかけとなって広がって
いけば良いと思います。
私自身も声を出していきたいし、
声を出せない女性の声も聞いていきたい。

私はキリスト教の信徒です。本日の講演を通し、
キリスト教会にも全く同様に当てはまる問題点
あると思われています。

参加者は性差別に問題意識のある方が多いと思いますが、
むしろ性差別に関心のない方に、
いかに関心を持ってもらうのが
大事なのではないのでしょうか。
ジェンダーカルタは楽しかったです。
教区でも是非やりたいと思います。

寺は平日の方が出やすいということはあるのですが、
今の若い方は働いているので、一緒に聞けないのが残念に思いました。
声に出せる場が地方にも増えればと思いました。
思いは、いっぱいもっている人はいるのですが、
場がない、知らないということがあると思います。

変成男子・女人成仏のシンボのすれ違いには考えさせられた。
女性女性のまま、男性は男性のまま、
そのまま往生ということはない。
「転」ということが核心にあると思うが、
そのことはどうなのか。
戦時教学の問題も踏まえて考えたい。

基調講演の梶原先生のお話が聞きたくて来ました。
住職そして坊守の責任もちゃんとおっしゃったのが
良かったです。
シンポジウムでは、女性参加者の思いが
梶原先生のおっしゃりたいこととずれていました。
それだけ女性が置かれている現実が厳しいのですが、
少し残念でした。

基調講演は女性の方がよかったのではないのでしょうか。
カルタはとてもよいですね。

いろいろな考え方、女性の歴史など、
あわせて考えられる時間でした。
男の立場、女の立場、声に出して言うということは
健康的だと思います。
いろいろな地域に広がっていけばと念じます。

カルタとりの後の話し合いが楽しかったです。
もう少しカルタの中に、めざす世界、
浄土の内容などが女性・男性に関わるものとして
取り上げられていたら良かったと思います。





解放運動推進本部では、宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌期間中（二〇一一年三月十二日～五月二十八日）、総会所で「カフェあいあう」を開催しました。そこでは部落差別問題・ハンセン病問題・性差別問題・死刑制度など、同朋社会の顕現をめざした大谷派の解放運動と非戦・平和の歴史についてのパネルを展示しました。カフェコーナーでは、コーヒーや紅茶などが無料でふるまわれました。女性室スタッフは来場者への飲み物の提供や性差別問題の解説という形で協力しました。足を運んでくださった八千人を超える人たちとどのような出会いがあったのか、女性室スタッフが報告します。

一杯のコーヒーから

カフェあいあうで出あったこと



総

会所の雰囲気と一杯のコーヒーは人と人をつなぐ大きな力を持っています。ある年配の女性が、自分の父親を老人ホームに入所させ、弟から「姉さんは定年退職してひとり暮らしなのに、なぜお父さんの世話をしてくれないのか」と非難を受けているという切々と語られました。いままでの生活の中での関係などで、親子といえども、老いた父親をどうすることもできないからだ。そんな彼女が、「はじめてお会いした方に、こんなに自分のことを話したのは今まで一度もありません」と言われ、「老人ホームの代金を支払うのも立派な介護だと思えますよ」と話しました。帰っていく彼女の足取りが少しでも軽くなることを願うばかりでした。

岩根 ふみ子

注

文を間違えないかと心配しつつ、初めてカフェのカウンターの中に立ちました。私の前で語り出す人たちの言葉は、その人の生きざまの一端を感じさせてくれました。自然に笑みがこぼれたり、苦悩に共感したり、出あえた数だけ心がゆさぶられました。「人間」の有りさまが本当によく見える場でした。お店でカウンターの内側にいる方々のすごさにはじめて気づいた機会でした。語られる言葉を黙ってそのまま受け入れて耳を傾ける姿勢は、寺という場においても大切な姿勢として重なったことです。

見義悦子



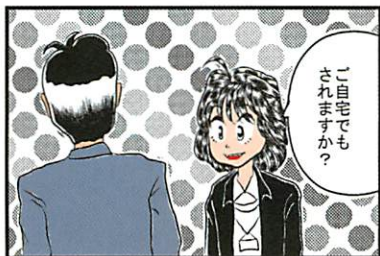
3

月11日の震災について、『同朋新聞』に載った高史明さんの言葉を読んで、仙台から来られた方がいました。コーヒーを飲みながら地震の様子や、体育館での避難生活を送る困難さを切々と語ってくれました。時折、古い総会所の戸が風でガタガタと揺れる度に、その身が反応する様子を見て地震の恐ろしさを思い知らされました。人間に必要なのは、物資はもちろんのことですが、人を生かす言葉であることを教えられました。

草野 龍子

ある日のカフェ

by つちやよしふみ



家
家族との関係を嘆くおばあさんや、昔の手柄話を語るおじいさん。答えを出すわけでもなく、その話をうんうんと聞いている祖母。それが私の子どもの頃の寺の日常でした。今思えば、生活の場で抱え込んだ愚痴を安心してこぼせる唯一の場所が寺だったのではないのでしょうか。誰が来てもいいところが確かにありました。「カフェあいあう」ってちよつと気取った名前ですが、どこにでもあった「おてら」の原風景に回帰する場所であるように思います。

本多 祐徹



誰
「誰」とも話さない日がほとんどなので寂しい」とカウンターでコーヒーを飲みながら語ったのは50代半ばの1人暮らしの男性でした。私は何と返事をしていたかわかりませんでした。食事はコンビニで買ったものがほとんどで炊飯器は持っていないと言います。仕事が週に3日しかないので生活は苦しそうでした。休みの日はカフェに来てくれました。やがてアパート代が払えなくなり、ネットカフェの堅い椅子で眠れない夜を過ごしていました。最後に会った日はあんな1つしか食べていなかった。「カフェあいあう」で出会った忘れられない人です。

藤場 芳子

若
若いパパが1人で小さいお子さんを連れて、子守しつつ来ていた姿に出会いました。寒い時だったので、カウンターでお子さんを膝に乗せて、お出したホットレモンを飲ませていた姿にホッとしました。偶然カフェに立ち寄られたモンゴルのストリートシンガーの女性が、その場に居合わせた来場者やスタッフ全員に、モンゴルの歌を披露して下さったこともありました。その時はカフェがモンゴルの草原になったひとときでした。

中川 和子

毎
毎日、「カフェあいあう」に顔を見せに来てくれる人が、数名いました。常連さんです。たまに出勤する私を覚えてくれました。何気ない会話をしながら、時間を費やしていました。社会の枠組みの中で行く場所が見当たらない人にとって、「カフェあいあう」が安心して居られる場所になっていました。場を開く大切さと同時に、一人ひとりと関わり続けることの大変さを痛感しました。

藤原 勲



一九九六(平成八)年、宗門で初めて女性の宗門活動への参画推進に取り組むべく「女性室」が開設され、十五年目を迎えました。

女性室では、これまでの活動を振り返り、そこから今後の方向を明らかにしたいとの願いから、今年二月に参拝接待所ギャラリーにおいて「女性室ギャラリー展 男女両性で形づくる教団をめざして―女性室の歩み―」を開催しました。また御遠忌期間中には総会所の「カフェあいあう」において同展のパネル展示を行いました。

あらためて、この誌上で女性室ギャラリー展の一端を紹介します。

1 女性の得度への道のり

写真1

○庶務課七級出仕三那三能宣伺
爰ニ一女子アリ我宗教ニ歸依シ尼僧トナリテ小教校ヘ
入學シ終身教義ニ従事致シ度旨申立候者有之節ハ得度
御許可相成追テ布教堪任ノ見込有之節ハ試補以上ノ教
職及正副住職薦舉爲致不苦哉將女子ニシテ僧衆ノ儀御
許可無之儀ニ候哉
(指令)書面何之趣當分難及指揮候事
明治十二年四月十一日
千百地聖

明治期以降、真宗大谷派では、女性の「得度」(僧侶となること)を認めてきませんでした。従って女性は、得度して僧侶となることも、仏教を学ぶ学校に入り、寺院の住職となることも認めませんでした。

写真1は、一八七九(明治十二年)、当時の本山の職員が「一人の女性が宗派に帰依し学校へ入学したいと申し出ています。女子では僧侶となることを許可することはあり得ないことでしょうか」という趣旨の「伺い」を立てたものですが、入学と得度は認められませんでした。

既にこの当時、得度の門をたたいた女性があつたのです。

女たち男たちの歴史、

今、そしてこれから

女性室ギャラリー展男女両性で形づくる教団をめざして―女性室の歩み―より

2 坊守帰敬式

一九二五(大正十四)年八月一日、「坊守規程」(写真2)を制定し、その中で「坊守帰敬式を受け坊守衣を許可せられたる坊守にして別に定むる試験に合格したる者は其の所属檀信徒に対し法務を執行することを得」としました。ここに「坊守帰敬式」という制度を設け、自坊に限って坊守衣・坊守袈裟を着けて法務を行うことを認めています。



写真2

この坊守袈裟は現在の「坊守章」です。ただし、この規程では「坊守は品行端肅克く教家の家婦たるの義務を尽し其の門信徒の模範たるは勿論仏祖崇敬法義相続に於て他に率先し自行化他の為に住職の内助を全からしめざるべからず」として、あくまで坊守は夫である住職の内助者としての位置であるとされています。

3 臨時女子教師検定合格者得度式記念写真



写真3

女性室では、これまでの活動の中で宗門の中に「性差別などは娑婆の問題だ」というような感覚が根強くあることに問題を感じてきました。そこで、近代以降の教団の歴史にその原因を尋ねる取り組みを行ってきました。そして、明治以降、教団が存続のために仏法と世法とを分けて、仏法を心の問題に矮小化して国の方針に従ってきた歴史、いわゆる「真俗二諦」の問題が今なお大きな影を落としていると感じています。性差別の問題は、単に女性が「男並み」になることではありません。一人ひとりが長い歴史

戦争が激しくなり、多くの男性が戦場に送られ、僧侶も戦場に征き、寺の住職や男性僧侶がいなくなりました。教団は一九四二(昭和十七)年、男性僧侶の「代務」として女性の得度を認めることとしました。それは女性差別を廃止するというより、寺院運営上の必要に迫られての得度の許可だったといえます。写真3は、一九四四(昭和十九)年五月十三日、臨時女子教師検定合格者の得度式記念写真です。

戦後の一九五一(昭和二十六)年、男子の得度制限九歳以上に対して、女性の得度は成人以上と、男女の格差が規則の中に謳われました。男女とも得度が九歳以上となったのは一九九二(平成四)年のことでした。

の中で刷り込まれてきた「女らしさ・男らしさ」という意識を超えて、ともに同朋として宗門の活動に「平等に参画」することから、新たな宗門組織の再構築を目指して活動を進めていくことが必要だと思っています。

差別の克服、人間解放の道筋を明らかにする、それが念仏の教えの要ではないでしょうか。この度の御遠志を機に、私の中の差別の心と向き合い、それを課題として教えに学ぶ、そういう取り組みが始まることを願われます。

●文／女性室スタッフ 本多祐徹

● 第11回 女性会議 ●

真宗と人権

女性室では2010年5月24日から25日、真宗本廟研修道場において『真宗と人権 —『御文』について・女性差別の視点から—』をテーマに、第11回女性会議を開催しました。

参加者からは、女性の立場から教学と儀式を問う活発な意見が交わされました。

今回は講師に蓑輪秀邦氏（教学研究所長）をお迎えしました。

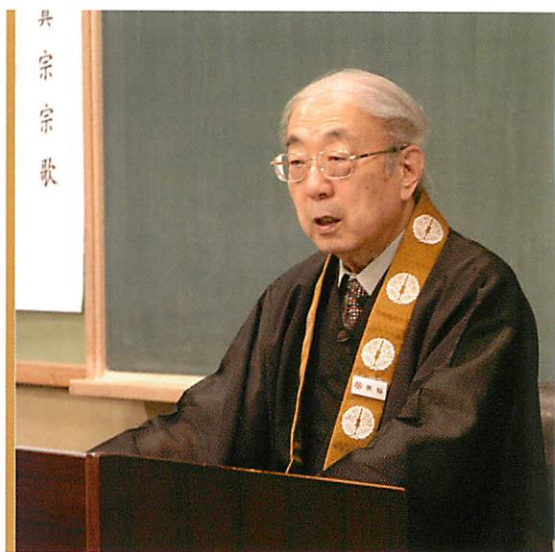
蓑輪氏は講義のはじめで、釈尊以前のBC2500年頃から徐々にインドへ侵入してきたアーリア語族が、混沌としたインド世界を統一していくためにカースト制という階級社会を作り、それまで母系中心だった社会を父系中心の社会に転換していく中で女性蔑視の思想が生まれてきたということを中心に、それから現代に至るまで続いてきた仏教の性差別の問題に関して述べられました。ここでは蓮如上人の『御文』についての部分を中心に抄録します。

『御文』について・女性差別の視点から

六世紀に朝鮮半島を通して仏教が日本へ伝来されました。その仏教を我が国に取り入れるか否かを巡って騒乱がありましたが、仏教受容に積極的な豪族蘇我氏が政権を握ったため仏教は我が国に定着し始めました。しかしそれが本格的に人々の心の拠り所となったのは聖徳太子が登場してからでした。その頃、三人の女性が朝鮮半島の百濟まで行って受戒し、我が国初の僧になりました。そのころの日本社会には男女差別はあまりなかったと思われまふ。聖徳太子は成人後に我が国初の女帝推古天皇の片腕となつて、仏教興隆の仕事をし、『勝鬘經』という女性救済を主題とする經典に依つて三宝に基づく国家形成の事業を精力的にされました。仏教が女性を蔑視するようになったのは古代から中世にかけての時代だったと思われまふ。

■日本で最初に戒を受けた三人の女性僧

□講師／蓑輪秀邦氏
教学研究所長



■法然から存覚へと継承された「女人往生」

中世初期に出た法然の『無量寿経釈』では『大經』の第十八願をあげて、この願では男女の別なくすべての人が往生できると説いてあるのに、第三十五願に重ねて女人往生を誓っているのは何故かという問いを立て、「つらつらこの事を案ずるに、女人は障り重くして、明らかに女人に約せずば、即ち疑心を生ぜん。そのゆえは、女人は過多く障り深くして、一切の処に嫌われたり」と答えています。「女人は障り重くして」とか「女人は過多く障り深くして」とかという女性蔑視の表現が多くなっています。こういう表現とその根底にある差別の意識は、存覚の『女人往生問書』に受け継がれていきます。存覚は親鸞の曾孫で本願寺第三世覚如の長男ですが、この三十五願の女人往生の見解が、本願寺第八世蓮如の『御文』に取り入れられていきます。その間には親鸞や覚如の存在があるのですが、女人往生の教説は法然→存覚→蓮如と飛んでいます。

■蓮如と女性

蓮如は、積極的に女性に布教した人です。彼は比叡山の庄迫から逃れて越前吉崎に坊舎を建て、人々に親鸞の教えを伝えました。やがて加賀・越中・越後などからより多くの人々が集まりはじめましたが、そこには女性たちの姿もありました。吉崎の「嫁おどし」の話は、嫁が毎夜蓮如上人の元へ聴聞に行くので姑が怒って帰り道に鬼の面を



かぶって嫁をおどしたが、鬼の面が姑の顔から離れなくなったという話です。これは蓮如の教化がどれほど女性に新鮮だったかを示す話でもあったと思います。その吉崎には「多屋^{たや}」がたくさん建ちました。蓮如の説法を聞こうとする人々が絶えないので、門徒衆をつれて来た坊主たちは小屋を作ってそこで寝泊りしながら順番を待ったわけです。その宿坊を多屋と呼びますが、その人たちの世話係が、『御文』に「多屋^{たや}内方^{ないほう}」という名で出る女性たち、つまり近世以来呼ばれてきた『坊守』たちだったわけです。蓮如は、その多屋内方宛に多くの手紙を出しました。それが『御文』に出ています。あなたたちは、ただ門徒衆のお世話をするだけでなく、聴聞してくださいという気持ちで書かれたのだらうと思います。しかし、その手紙の内容に用いたのが存覚の『女人往生聞書』だったので、文章には女性差別の言葉が多くあります。例えば『御文』二帳目第一通には「女人の身は、十方三世の諸仏にもすてられたる身にて候うを、阿弥陀如来なればこそ、かたじけなくもたすけましまし候え。そのゆえは、女人の身は、いかに真実心になりたりというとも、うたがいの心はふかくして、…」とあります。このような女性観は中世から近世へと少しずつ変容しながら伝わりました。その間に、蓮如自身が女性に願った熱い思いよりも、差別表現そのものがひとり歩きし出し、女性の自立を遅らせるという結果を招いたということ、そのことをしっかり確認しておかなければならないと思います。

五障三従の起源^{ごしょうさんじゅう}

蓮如の『御文』の中でもう一つ問題なのは「五障三従」という言葉です。「五障」は、女性は梵天王・帝釈天・転輪聖王・仏など指導的な位には決して就くことができないという思想、「三従」は女性は幼い時は親に、結婚すれば夫に、老えば子に従わなければならないという道德観です。このような考え方は、仏陀誕生以前のインドに成立した『マヌ法典』によって固定化され、徹底した女性差別が行われるものになったものです。それがいつの間にか仏教の教えの中に混入し、いかにも真理であるかのように中国、朝鮮半島、日本へと伝わって『御文』の中にも表現されることになったと思われまます。そういう歴史があることを、私たちは知らなければならないと思います。

これからの真宗教団として

人間は男性に都合がよい社会を作るために女性蔑視を伝統してきました。それに対する反省、懺悔を私たちはもたねばならないと思います。女性に対して、「いたりて罪の深き身なり」「上臆^{うろ}にも下主にもよらぬ身なり」「五障三従の身なり」などという『御文』の表現を正当化してはなりません。また「変成男子」「転女成男」というような考え方もいまでは通用しないでしょう。そういうことを真宗教団として明確にすることがとても大事な仕事だと思います。(抄録)

女性室公開講座 長浜会場

Public Lecture
@Nagahama
Report

長浜教区第16組浄願寺
さわも せんりょう
澤面 宣了 (公開講座実行委員長)

私は縛られる人？ 縛る人？ ～共に解放される道を求めて～

去る2010年6月10日、長浜別院を会場に

女性室公開講座長浜会場が開催されました。

教区の公開講座実行委員による寸劇がおこなわれ、

女性と男性が因習などにより縛られている現実を、

笑いを交えて表現されました。

その後、酒井義一氏(東京教区東京5組存明寺住職)の講義を受けました。



講師

東京教区東京5組存明寺住職
酒井 義一 氏

〈開催趣旨〉

当地が歴史の中で培ってきた「土徳」は、
私たちにお念仏の教えを伝え、導いてくれます。

しかしながら、ここで住むことに
息苦しさを感じるのはなぜでしょうか。

今回の公開講座の開催にあたって、
「私たちが共に束縛から解放される道」を
問い尋ねていきたいと思います。

この度の寸劇、酒井義一さんの講演から、今、
尾崎一雄著の「虫のいろいろ」の中にあるノミ
の話を思い出します。小さな丸いガラス玉の中
に、ノミを入れて下からぽんぽんと叩きます。
すると、ノミは驚いてパッと跳び上がります。
当然かちんと頭をぶつけます。すると、ノミは
だんだん賢くなつて(?)考えます。自分は跳ぶ
のが本当だと思っていたが、どうも違う。跳ぶ
というのは間違っているようだ。これを何度か
繰り返すと、ノミはもう跳ばなくなり、最後は
ごそごそと歩く習性に変えられてしまいます。

これと同じように、私たちもまた「社会」と
いう名のガラス玉の中で、ぽんぽんと叩き、叩
かれ、習慣づけられてきたことが多々あり、そ
れによってお互いが縛り、縛られているのです。
この跳ばないノミのように、本来性を失って生
きているのが、実は私であると教えられたよ
うに思います。今後、「共に解放される道を求
めて」を当教区の課題としていきたいと思っ
ています。



Public Lecture @Nagahama Report



長浜教区第14組長願寺
おかぎ のりこ
陵木 法子 (公開講座実行委員)

長浜教区で行われた女性室公開講座は、実行委員に13名の坊守会スタッフが加わりました。9回の委員会がもたれる中で、テーマは「私は縛られる人？ 縛る人？」共に解放される道を求めて」に決まり、講師は東京教区の酒井義一先生にお願いすることになりました。そして問題提起という意味で、テーマに基づいて寸劇をするとなえなあとということになり、担当を公開講座実行委員の中から坊守会スタッフがすることになりました。

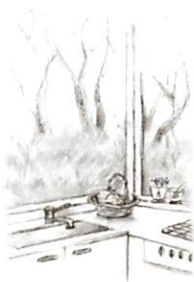
さあたいへんです。どうしよう、どうしようと言いながら、委員会での話の中から4つの内容にしぼり、①座席班―座る順について ②車班―住職が乗る車について ③外出班―女性 は外出しにくいのかについて ④男性班―男性目線から。配役を決め、大道具、小道具作り、前日のリハーサル、本番寸前まで変更に次ぐ変更、そして本番です。百余名の参加者に大うけです。アンケートでも「寸劇、よかったわあ」が圧倒的です。このことは、坊守会の大きな力となりました。ほんま、おおきにでした。



長浜教区第14組光覺寺
えのき たえこ
榎 妙子 (参加者)

第1部の寸劇では、普段の生活の中で感じる何気ない会話や行動を見ることができました。そこでは、笑いの中にも、あたりまえとしてきた「女性だから」「男性だから」といった窮屈で息苦しいと感じる事もあれば、湖北地域独特の素晴らしい「土徳」を領きながら見ることができました。これまで培われてきた「土徳」の素晴らしい面を、これからの世代に継承していきたいらいいなと思います。

引き続き第2部の酒井義一さんの講演では、「連鎖する縛り」という言葉が印象に残りました。例えると虐待を受けた人は、自分の子どもを虐待するという連鎖を生み出すということでした。虐待は世間で問題となっていることですが、虐待を受けた子は嫌な思いを自分の子にさせるといふ連鎖行動にとっても驚き、子を持つ身として関心をもちました。



あいあう

女性室広報誌『あいあう』第23号
発行 2011年12月31日
発行人 林 治
発行所 真宗大谷派宗務所
解放運動推進本部女性室
〒600-8505
京都市下京区烏丸通七条上ル常葉町
TEL 075-371-9247
FAX 075-371-9224

『あいあう』とは…

the origin

この広報誌の名前である『あいあう』は、親鸞聖人によって書かれた『教行信証』(顕浄土真実教行証文類)「行巻」の「今みなまた会して、これ共にあい値えるなり」【真宗聖典一五九頁】という言葉から名づけられました。「遭遇うこと難し」とか「遇いがたくして今遇うことを得たり」という言葉もありますが、いずれにしても出遇いのよろこびが表わされているのでしょう。

日々の生活にあって、わたしたちが“生きる”ということを考えたとき、それは、いろいろな人と声をかけあってこそ“生きる”ということがなりたっているといっても過言ではありません。しかし、時にその声が届かなかったり、行き違ったり、そのためにいろいろな出会いをしていながら、まわりの人を見失っているのではないのでしょうか。

いま、その出会いそのものに出遇いなおすことによって、自然に向きあうことのできるつながりを回復していきたい。『あいあう』という言葉にはそんな願いがこめられています。

あい、あう、女性室では活動を通してさまざまな出会いを積み重ねていきたいと思います。

女性室の活動 our activities

●スタッフ派遣

〈2010年〉

11月17日 高田教区男女平等参画を考える会へ講師として参加

〈2011年〉

2月16日 女性と仏教・東海ネットワーク 例会への参加

6月15日 能登教区教化委員会への参加

10月3日 大垣教区「現代の課題に学ぶ学習会」への参加

11月3日 メンズカウンセリング協会総会への参加

11月16日 女性と仏教・東海ネットワーク 例会への参加

12月7日 女性室公開講座大垣会場事前スタッフ会への参加

12月18日 メンズカウンセリング協会事例検討会への参加

●公開講座

5月10日

会場：総会所

テーマ：なにが受け継がれてきたのか、なにを受け継いでいくのか

講師：梶原敬一さん

シンポジウム：尾畑潤子さん、平田玲子さん、梶原敬一さん

●男女両性で形づくる教団をめざす協議会

10月4日

会場：研修道場

new staff 新スタッフ紹介

中川 和子 (なかがわ かずこ)

私は自坊の事情から女性住職になりました。女性室主催の「女性住職の集い」に参加して、女性の住職には色々なケースがあることに正直驚きました。また女性室スタッフになって、男女平等が何かも全く見えないで暮らしていたことに初めて気がつきました。

女性住職の現場は女性であるがゆえに大変な面が伴います。法事の合間に法衣のまま子どものご飯を作り、夜の枕経では自動車に5人の子どもの詰め込んで出かけ、「ごえんさん、子どもさんが騒いでますが…」の声に「気にせんといて下さい」と応え、「現代版『子連れ狼』だね。車に旗立てたら」と友人に笑われる等々。

性差別の問題に関わるようになって、気づくことは大事なことだと知りました。自分の差別心にびっくりすることもいっぱいあります。駆け出しですが宜しくお願いします。

編集後記 from editor

2011年8月1日付けで女性室主任を命ぜられました。いただいた大切な場で精一杯努めたいと思います。

女性室の業務に関わるようになって、改めて家庭での家族との関わりということを考えています。「休みの日にはご飯も作るし、子どもとお風呂に入ってオムツも替えるのにまだまだ足りないのだろうか…」などと、思いついたことはちょっとお手伝いした程度のもので、いつの間にか自分を「よき夫」にすることばかりに力が入っていました。

妻や子どもの表情、言葉、色々な感情表現に対してきちんと耳を、心を傾けているのかというと、確かに対話することから逃げている時がたくさんあります。

子どもを寝かしつけようとすると、私の布団から必ず逃げていってしまうのは、「家庭での本当の関わりができていないからなのかな」と自省しつつ、女性室の関わりの中で学んでいます。どうぞよろしくをお願いします。(里雄亮意)